東郷村報

第107号
昭和35年9月15日
発行所
宮崎県東臼杵郡
東郷村役場
日向市富高
株式会社 安藤印刷所
電話64番

牧水祭記念号

牧水祭を迎えて

牧水顕彰会長　黒木松美

九月十七日は牧水先生の第三十二周忌に当りますので本年も坪谷「ふるさとの歌碑」前で牧水祭を行いまして、先生の御遺業を讃えることといたしました。

先生がわが文学史上に不滅の業績を残されましたことは、今更申すまでもありませんが、かく偉大なる歌人と郷土を同じくする私共東郷村民にとりましては、大きな誇りであるとともに感激の極みであります。

先生の作品は先生の純一無垢な心が旅に酒に富士に桜にそその他全生活を通して歌われているので、屈折の多い現代人の心魂にふれるものが多く、その心をどれだけ豊にしていることか、また日々の生活にどれだけうるみを与えているかは計り知れないものがあります。

今や先生の歌碑、詩碑は北は北海道から南は鹿児島に至る日本全土に亘つて建てられその数も二十を数えています。

本村に牧水顕彰会が組織されましたのは昭和二十六年九月でありますから、すでに十年の歳月を経たのでありますが、その間何等目にみえる仕事もできず、年一回の牧水祭を行う程度にとどまつていることは誠に慚愧に堪えないところであります。

今後牧水顕彰会が解決しなければならない課題は、先生の生家をはじめ遺墨遺品等その作品を長く保存してわが文化の向上に資することであると信じます。この事は単に顕彰会にのみ課せられた事業ではなく全村民に課せられた名誉ある責務であると思うのであります。

然してこの事業は坦々たるものでなく、多くの困難が伴つていますが、村民各位の文化の向上に対する熱意と理解を得、物心両面の協力を得るならば実現可能の事業であると確信いたしています。

この課題はいつの日にかは解決しなければならぬ、本村最高最美の文化事業であります。

本日牧水祭を挙行するに当り、今後共村民各位の御協力、御支援を切望してやみません。

牧水先生の生涯

―大悟法著「若山牧水」による―

若山牧水は本名は繁といひ、明治十八年八月二十四日の朝、坪谷に生れた。父は立蔵、母はマキ、三人の姉があつて、牧水は長男とはいうものの一番末子であつた。家は祖父の代からの医者であり、その祖父若山健海は埼玉県所沢の農家に生れ、少年時代から江戸に出て勉学し、後に長崎で西洋医術を学び、天保年間にこの坪谷に移り住んだものだが、嘉永二年に蘭人モーニツケが初めて現在の種痘法を伝えた時いち早くそれを学んでわが国で最も早く種痘普及に尽力した先覚者の一人であつた。

牧水は明治二十九年、十二才で坪谷尋常小学校を卒業してから、父母の膝下を離れて延岡に出て高等小学校に入り、第三学年修業の春延岡中学校が設立されると共にその第一回生として入学した。小学時代から小説を読みはじめ文学に対するあこがれをもつていたようであるが、中学二年も終りに近い三十四年二月に出た延岡中学校友会雑誌第一号に次のような三首の和歌が載つている。

早春懐梅
梅の花今や咲くらむ我庵の柴の戸
あたり鶯の鳴く
奢侈をいましむ
身に纏う綾や錦はちりひぢや
蓮の葉の上の露も玉かな
陰徳家
かくれたる徳を行ひ顕れぬ
人は深山の桜なりけり

これが牧水の作つた最初の歌であつたらしい。

しかし、ほんとうに歌を作りはじめたというのは三年生になつてからであり、そのころから牧水はさかんに文学の書を読むと同時に「中学文壇」その他の雑誌に文章や歌を投書しはじめている。そしてその入選がいよいよ文学熱をあふり立てることになつた。

明治三十五年、十八才の二月には友人たちと曙会を越して「曙」という回覧文芸雑誌を発行しはじめた。この年にはやや高級な文芸雑誌「新声」、「文庫」等の歌壇や地方新聞にも投稿しはじめ、また友人たちと野虹会という短歌研究の会を起したりもしている。その野虹会では翌三十六年四月から短歌専門の回覧雑誌「野虹」が発行され、これは「曙」と共に中学卒業後まで続けられた。

牧水は歌を作りはじめた頃から桂露、雨山、白雨、野百合等の号を次々に用いていたが、明治三十七年、二十才の一月ごろから牧水と改めた。母親の名マキと水と、その頃最も愛していたもの二つをとつたのである。家業が医者なので両親は牧水を医者にするつもりであつたが、牧水は文学を志望するようになり、明治三十七年春、延岡中学を卒業すると共に上京して早稲田大学文学科高等予科に入学した。そして上京後まもなく「新声」歌壇選者の尾上柴舟を訪うたが、この訪問によつて牧水ははつきり柴舟と結ばれることになつたのである。

明治三十八年一月には尾上柴舟を中心に、若山牧水、正富汪洋、前田夕暮、等によつて金箭会という短歌の会が起されたが、数ヶ月後には柴舟、牧水、汪洋、夕暮、四人の車前草社となりやがて三木露風、有本芳水がこれに加わり、その作品は「車前草社詩草」としてずつと新声に発表されるようになつた。

明治三十五、六年頃から与謝野鉄幹、同晶子の新詩社風の歌、すなはち明星調が全歌壇を風靡してしまつた時代である。牧水は初め佐々木信綱、金子薫園あたりの作風を思はせる歌を作つていたが、その信綱、薫園等から尾上柴舟、窪田空穂その他殆んど全部の新派歌人が知らず識らずのうちに新詩仕風、特に晶子調の影響を受けずにはいられなかつた時代だけに若い牧水は勿論その影響を受けている。

そして車前草社初期の牧水の歌は概して実情実感からは遠い空想的な優婉華麗なものであつた。三十八年三月号の新声に発表された七首のうち後半の四首をあぐれば次のようなものである。

相ふるや緋染花ぞはなだ染　みやこの春は袖の波よる
振袖の寝すがたかつぐ山路　籠のはだか男を捲く桜かな
美しうちさき歌よとほぼえまれ　姉にそむけば春の雪ふる
春の日は孔雀に照りて人に照りて　彩羽あや袖鏡に入るも

この年九月からは英文科本科生となつた。

そして翌三十九年の春あたりから同級生六名と共に北斗会を結んで毎週一回集つて小説の研究をやるようになり、やがて回覧雑誌「北斗」を出しはじめた。これはその頃文壇に抬頭して来つつあつた自然主義文学の刺戟によるもので、牧水は特に国木田独歩に私淑してしきりに独歩ばりの短篇を書き、将来は小説家として立とうという野心をいだいていた。小説勉強のためのこの自然主義研究が作歌の上にも影響して来ない筈はなく

秋の灯や壁にかかれる古帽子　袴のさまも身にしむ夜なり
机のうへ植木の鉢の黒つちに　萠え出る芽あり秋の夜の灯よ
水の音に似て啼く鳥よ山ざくら　松にまじれる深山の昼を

こういう歌が牧水の作に見られるようになつて来た。これは明らかに浪漫主義から自然主義への移行である。今までの歌の、空想的な夢幻的な、そして趣味や配合の世界からぬけて次第に現実を直写しようとする態度に変つて来たので、これは大きな進歩といつてよい。

明治四十年に入つてその歌は更に大きな進歩を示して居り、牧水初期の歌風が確立したのはこの年だといえる。某女性と恋愛に陥つたのもこの年、そしてその恋愛もまた作歌の上に大きな影響を及ぼしている。「新声」誌上に於ける牧水の存在もようやく一般からの注目を受けはじめて来た。

「幾山河」「白鳥は」その他牧水初期の代表作として今なおひろく愛誦されつつある歌のいくつかはこの年の「新声」誌上に発表されている。

明治四十一年の三月頃、牧水はその下宿していた牛込原町のある小さな寺の離れに思ひがけぬ訪問者を迎へた。文潮社という出版書肆を始めようという人でその最初の出版として牧水の歌集を出したいというのである。二十四才の若さでまだ学生の身、華やかな空想は描いていてもまだ殆んど無名の牧水は勿論驚喜した。

こうして処女歌集「海の声」が編集され、その校正刷が出はじめたのは恰度学校の卒業試験のはじまつた時であつた。

ところが困つたことには発行所文潮社は急に廃業することになり印刷費の出所がなくなつてしまつたのである。さりとて今更中止するわけにも行かない、牧水はやむを得ず自費出版の決意をして、友人たちにも頼み出版費の金策に奔走せねばならなかつた。郷里の家はずつと以前から家運が傾き牧水の学資さえ満足に出すことが出来なかつたのである。

明治四十一年七月、牧水は早稲田大学英文科を卒業した。そしてその月に「海の声」も発行された。だが、文学志望の牧水に思はしい就職口はなく、自費出版の「海の声」の売行きはさんざんであり、加うるに前年あたりからの恋愛の方も甚だ面白く行かず、卒業後の牧水の生活はかなりみじめなものであつた。牧水は「新文学」という雑誌の発行を計画したが、資金難のためにそれも思うにまかせなかつた。

焦躁と憂鬱のうちに明治四十二年も半ば過ぎて七月から「中央新聞」に社会部記者として入社したが、十二月初めにはそれもやめてしまつた。すると恰度その頃東雲堂書店で新雑誌発行の計画があり編集を牧水に依頼して来た。そしてその話が順調に進み、誌名は「創作」と決定、翌年春創刊ということになつた。

明治四十三年一月には第二歌集「独り歌へる」が発行されたが、名古屋の八少女会という小さなところから出たので、発行部数も極めて少く、勿論広く認められよう筈がなく、牧水自身を失望落膽させたばかりであつた。しかし、三月に創刊された詩歌雑誌「創作」は歌壇ばかりでなく全文壇の視聴を集め、久しく沈滞気味だつた詩歌壇がそのために活気を呈して来た位の目ざましい成功であつた。

その間に第三歌集「別離」の出版計画も進められ「創作」発行所東雲堂の手によつて四月に発行された。内容からいへば大体に「海の声」と「独り歌える」とを併せそれに若干の新作を加へただけのものであるが、これはしつかりした発行所から出て宣伝の行き届いたせいもあり、牧水は一躍歌壇の花形となり、これまで柴舟門下の双璧として肩を並べて来ており「別離」発行直前に「収穫」を出していた前田夕暮と共に、新詩社の歌風が既に衰へかけていた歌壇に、新しく牧水、夕暮時代を現出させたのである。

こうして名声だけは高くなつたけれど、経済的には甚だ恵まれぬ生活であり、また恋愛の方も妙にこじれた状態となり、はては身心共に疲労困憊「創作」の編集を友人に譲つて一度は漂泊の旅に上つたこともあつたが、明治四十四年一月には創作社を起して自ら「創作」の編集経営に当ることになつた。そしてそれもうまく行かず、十一月には「やまと新聞」の社会部に入つたが、まもなく退社するという有様であつた。明治四十五年五月、太田喜志子と結婚した。そしてその月には新雑誌「自然」を出したが資金難のために一冊きりに終り、七月には父親の病気のために帰郷、十一月にその永眠に遭つたが、その前後に近親から郷里にとどまつて就職することを求められ、進退に迷ひ苦悶懊悩の日々を送つた。第六歌集「みたかみ」所載の三十一音という短歌の約束を放棄した所謂「破調」の歌はその間の所産であり、牧水の歌風変遷の上から注目すべきものであると同時に歌壇史の上でも記念すべき作品である。

大正二年六月、殆んど一年ぶりに東京生活にかえつた牧水は八月からまた「創作」を復活させた。その後牧水は妻の病後の転地療養のため大正四年三月から大正五年末まで神奈川県三浦郡北下浦村に移つていた間を除きずつと東京生活を続けていたが、久しい間の念願であつた田園生活に入るために大正九年八月、静岡県沼津に移つた。

沼津に移つてからの生活もかなり苦しかつたが、その選歌を受持つ新聞雑誌の数が次第に多くなると共に収入も次第に増して生活もいくらか楽になつて来つつあつた。大正十三年には住宅兼雑誌発行所の建築を計画し、資金を作るために短冊色紙半折の揮毫頒布をはじめ、大正十四年秋かなりの無理をして新築、また翌十五年五月には多年の宿望であつた詩歌綜合雑誌「詩歌時代」を創作したが、資金不足のため思うように行かず、六号限りで涙を呑んで廃刊するに及んで、欠損補充のために更に苦しい揮毫行脚を続けねばなくなり、遂に北海道や朝鮮にまで出かけ、その疲労もあつて、ずつと健康を害していたが昭和三年九月初めから臥床、同月十七日、千本松原の蔭の家に永眠した。病名は急性腸胃炎兼肝臓硬変症で、行年四十四、沼津市浜道乗運寺内の墓地に葬られた。

牧水先生の作品

―先生の歌集から―

別離抄

水の音に似て啼く鳥よ山ざくら　松にまじれる深山の昼を
なにとなきさびしさ覚え山ざくら　花ちるかげに日を仰ぎ見る
山越えて空わたりゆく遠鳴の　風ある日なり山ざくら花
母恋しかかる夕べのふるさとの　桜咲くらむ山の姿よ
父母よ神にも似たるこしかたに　思ひ出ありや山ざくら花
吾木香すすきかるかや秋くさの　さびしききはみ君におくらむ
中国を巡りて
けふもまたこころの鉦をうち鳴らし　うち鳴らしつつあくがれて行く
幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく
耶馬溪にて
安芸の国越えて長門にまたこえて　豊の国ゆきほとときす聴く
ただ恋しうらみ怒りは影もなし　暮れて旅籠の欄に倚るとき
南日向を巡りて
白つゆか玉かとも見よわだの原　青きうえゆき人恋ふる身を
日向の国都井の岬の青潮に入りゆく端に独り海見る
紀の国にて
ちんちろり男ばかりの酒の夜を　あれちんちろり鳴きいづるかな
一の札所第二の札所紀の国の　番の御寺をいざ巡りてむ
安房にて
山ねむる山のふもとに海ねむる　かなしき春の国を旅行く
白鳥はかなしからずや空の青　海のあおにも染まずただよふ
いかなれば恋のはじめに斯くばかり　寂しきことをおもひたまふぞ
いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見む　このさびしさに君は耐ふるや
八月の初め信州軽井沢に
遊びぬ
天地のしじまわが身にひたせまる　ふもと野にいて山の火を見る
火の山にしばし煙の断えにけり　いのち死ぬべくひとのこいしき
青草によこたわりいてあめつちに　ひとりなるものの自由をおもふ

路上抄

海底に眼のなき魚の棲むという　眼の無き魚の恋しかりけり
われ二十六歳歌をつくりて飯に代ふ　世にもわびしきなりはひをする
摘草のにほい残れるゆびさきを　あらひて居れば野に月の出づ
六月中旬、甲州の山奥なる某温泉に遊ぶ
初夏の雲のなかなる山の国甲斐の畑に麦刈る子等よ
山々のせまりしあひに流れたる　河といふものの寂しくあるかな
しらじらととほき麓をながれたる　小川ながめて夕山を越ゆ
九月初めより十一月半ばまで信濃国浅間山の麓に
遊べり
秋晴れのふもとをしろき雲ゆけり　風の浅間の寂しくあるかな
かたはらに秋ぐさの花かたるらく　ほろびしものはなつかしきかな
白玉の歯にしみとほる秋の夜の　酒はしづかに飲むべかりけり
秋風のそら晴れぬれば千曲川　白き河原に出てあそぶかな
多摩川の少にたんぽぽ咲くころは　くれにもおもうひとのあれかし

死か芸術か抄

手術刀
蒼ざめし額つめたく濡れわたり　月夜の夏の街を我が行く
おほいなる青の朴の葉ひと葉持ち　林出づればわが身さびしも
酒無しにけふは暮るるか二階より　あふげば空を行く鳥あり
秋かぜや日本の国の稲の穂の　酒のあぢはひ日にまさり来れ
信濃より甲斐へ旅せし前後の歌
をちこちに山桜咲けりわが旅の終らむとする甲斐の山辺に
見わたせば四方の山辺の雲深み　甲斐は曇れり山ざくら咲く
五月末、相模国三浦半島の三崎に遊べり
あかあかと西日にうかび安房が崎　相模の海に近く寄るなり
かんがえて飲みはじめたる一合の　二合の酒の夏のゆふぐれ
夏はいまさかりなるべしとある日の　明けゆくそらのなつかしきかな

みなかみ抄

故郷
ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ　秋もかすみのたなびきて居り
母が飼ふ秋蚕の匂ひたちまよふ　家の片すみに置きぬ机を
ほたほたとよろこぶ父のあから顔　この世ならぬ尊さに涙おちぬれ
母をおもへばわが家は玉のごとく冷たし　父をおもへば山のごとく温かし
黒薔薇
新たにまた生るべし、われとわが身に斯く言ふとき、涙ながれき
わが悲しみは青かりき、水のごとかりき　火となるべきかはた石となるべきか
さうだ、あんまり自分のことばかり考へていた、あたりは洞（ほらあな）のように暗い
父の死後
なんとやら頭ばかりが重たうて　歩きにくかりぐつと踏みしめむ
眼をひらかむとして、またおもふ、わが生の日光のさびしさよ
海及び船室
有明の海のにごりに鴨あまたうかべり、船は島原へ入る
冬雲のかげりに暗き島、岬憂き島原へわが船は入る
酔樵歌
われも木を伐る、ひろきふもとの雑木原春日つめたやわれも木を伐る
春の木立に小斧振ることのかなしさよ、前後不覚に伐りくづしけり

秋風の歌抄

秋日小情
秋の葉の日に光るかなひそひそと　急ぐははやも散りしきりつつ
玉に似てこころふとしも静まりぬ　路傍のおち葉踏むに耐へむや
或る時はあはれを乞へるをとめ子の　なみだの如く眼をあぐる犬
さびしき周囲
わくら葉の青きが庭に散りてあり　朝はひとみのわびしいかなや
天つ日の匂ひしづかに身にもしみ　あはれしばしは眠れこころよ
なすべきをなさざる故にこの如く　さびしきものとなりしやわれは

砂丘抄

山の雲
朝空に黄雲たなびき蜩のいそぎて鳴けば夏日かなしも
ほととぎすしきりに啼きて空青し　こころ冷えたる真昼なるかも
時をおき老樹の雫おつるごと　静かき酒は朝にこそあれ
母を憶う歌
春あさき田じりに出でて野芹つむ　母のこころに休らひのあれ
余念なきさまには見ゆれ頬かむり　母が芹つむきさらぎの野や
とある日の朝のさびしきこころより　冬の野に出でて君恋ふるかな
あは雪を手にもてるごとき　あやふさを　老いませば君につねに覚ゆる
あけくれ
貧しさに妻のこころのおのづから　険しくなるを見て居るこころ

朝の歌抄

秋より冬へ
秋日さすまばら小松の丘越しに　磯あらふ浪のひねもす聞ゆ
冬の日のあはれ今日こそ安からめ　土を染めつつ朝照り来る
春浅し
わが庭の竹の林の浅けれど降る雨見れば春は来にけり
ひとかたまり菜の花咲けり春の日の　ひかり隈なき砂畑の隅に
残雲行
ひつそりと馬乗り入るる津軽野の　五所川原町は雪小止みせり
帰る雁とほ空ひくく渡る見ゆ　松島村は家まばらかに

白梅集抄

椋の葉の風
朝床の枕のうへにながれ入る椋の葉の風雨よぶらしも
山百合
夏草の茂みが上に伸びいでてゆたかになびく山百合の花

さびしき樹木抄

朝
ひんがしの白みそむれば物かげに　照りてわびしきみじか夜の月
疲れつつ起き出で来ればみじか夜の　月残りいて黍の葉の影
或る夜
蚊帳に見ゆる夜ふけの風の冷たきに　こころ覚め居れば蚊のなく聞ゆ
をりをりに吹き入る風の蚊帳をあふり　こころさびしも秋のごときに

渓谷集抄

秩父の秋
石越ゆる水のまろみを眺めつつ　こころかなしも秋の渓間に
伊豆の春
よりあひて真すぐに立てる青竹の　籔のふかみに鶯の啼く

くろ土抄

或る夜の雨、その他
あららかにわが魂を打つごとき　この夜の雨を聴けばなほ降る
口にしてうまきこの酒こころには　さびしみおもひゆふべゆふべ酌む
いついつと待ちし桜の咲き出でて　いまはさかりか風吹けど散らず
比叡山にて
をちこちに啼き移りゆく筒鳥の　さびしき声は谷にまよへり
比叡山の古りぬる寺の木がくれの　庭の筧を聞きつつ眠る
奈智にて
白雲のかかればひびきこもりあひて　滝ぞとどろくその雲の陰にとどろとどろ落ち来る滝を
あふぎつつ　こころ寒けくなりにけるかも
雑詠
みじか夜の有明の月のかすかにて　ひんがしの空に雲焼くるなり
木の間よりわれにさしたる冬の日の　日かげは寒し光りながらに
二月の雨
しみじみとけふ降る雨はきさらぎの　春のはじめの雨にあらずや
ある夜
みじか夜のいつしか更けて此処ひとつ　あけたる窓に風の寄るなり

山桜の歌抄

野火
冴えかへり寒けき今日のうらら日に　野火の煙の青みたなびく
幼くて見しふる里の春の野の　忘られかねて野火は見るなり
秋近し
畑なかの小径をゆくとゆくりなく　見つつかなしき天の河かも
山ざくら
うすべにに葉はいちはやく萌えいでて　咲かむとすなり山桜花
うららうらと照れる光にけぶりあひて　咲きしづもれる山ざくら花
大野原の初夏
寄り来りうすれて消ゆる水無月の　雲のたえまなし富士の山辺に
酒
寂しみて生けるいのちのただひとつの　道づれとこそ酒をおもふに

黒松抄

夢
故郷に墓をまもりて出でてこぬ　母をしぞおもふ夢みての後に
父が墓は夢に見るなし白髪のうつしみびとの母をよく見つ
酒
笹の葉の葉ずえのつゆとかしこみて　かなしみすするこのうま酒を
ふくみたる酒のにほひのおのづから　独り匂へるわが心かも
炭火
櫟の木楢の木の炭をよしとおもふ　花咲けるごと焼の燃えたる
山に生ふる木々はうつくしみな親し　焼きて作れるこの炭もまた
渓間の春
萌えたてるうすべにの葉のゆたかにて　花いまだしき山ざくら花
寒がりしひと夜の雨にみかさまし　流るる渓の山桜花
合掌
うらかなしはしためにさえ気をおきて　盗み飲む酒とわがなりにけり
足音を忍ばせて行けば台所に　わが酒の壜は立ちて待ちをる
麦の秋
麦の穂の風にゆれたつ音きこゆ　雀つばくろ啼きしきるなかに
うれ麦のうれとほりたる色深し　葉さへ茎さへうち染まりつつ
曇を憎む
親竹は伏し枝垂れつつ若竹は　真直に立ちて雨に打たるる
降り入れる雨に葉末をことごとく　ふるはせてをり若竹むらは
最後の歌
酒ほしきまぎらはすとて庭に出でつ　庭草をぬくこの庭草を
芹の葉の茂みがりへに登りいて　これの小蟹はものたべてをり

私の歌の出来た時

春の歌

桜の花
嫌ひではないのに、私にはこの花の歌は少い。ずつと以前、十八、九才の漸く歌を作り始めたころには却つて多かつたやうである。然しそれも多くは題詠風の幼いもので、
母恋しかかるゆふべのふるさとの桜咲くらむ山の姿よ
春はきぬ老いにし父の御ひとみに白うつらむ山ざくら花
行きつくせば浪あをやかにうねりゐぬ山ざくらなど咲きそめし町
などの類である。その次ぎに作つたのは明治四十五年春、信濃の山の中をぶらぶらと廻つた末、急に東京が恋しくなつて上諏訪から富士見辺の長い高原を汽車で通つて来ると、その高原を降りつくした甲斐の盆地にこの花が其処此処とほの白く咲いてゐたのを見て大いに驚きながら詠んだ三三首である。前夜泊つた上諏訪には未だ雪が深々と積つてゐたのであつた。
をちこちに山桜咲けりわが旅の終らむとする甲斐の山辺に
見わたせば四方の山辺の雲深み甲斐は曇れり山ざくら咲く
それから東京に帰つてゐると、間もなく四月の十三日に石川啄木君が死んだ。その臨終の枕辺から縁ひとつ距てた庭には八重桜が今を盛りと咲き盛つてゐた。
病みそめて今年も春はさくら咲き眺めつつ君の死にゆきにけり
君が娘は庭のかたへの八重桜散りしをひろひうつつともなし

夏の歌

夏の哀愁
次第に更けゆく夏の真中、しいんと照り沈んだ真昼などに何とも知れぬ哀愁を感ずることがある。非常に澄み入つた心の閃きを見ることもあれば、唯だもうやるせない身体の苦悩を覚ゆることもある。
梅雨雲の空にうづまき光る日はこころ石とも冷えてあれかし
ほろほろと遠く尺八鳴り出でぬこの曇り日の窓のいづれぞ
くもり日になきやまぬ蟬とわがこころ語らふごとく衰へて居り
輝けば山もかがやき家も照り夏真白雲わびしかりけり
向つ峰にけふもしらじら雲い立ち照り輝くに独り居にけり

秋の歌

芝山
どうかすると、居るにも居られぬやうな、静かな日に出あふことがある。秋に特にそれが多いやうだ。仕事は手につかず、他は勿論妻子にすら逢つてゐるのがつらい。
そんな時、私はよく手に酒と土瓶とを入れて附近の小さな山に出かけてゆく。山に雑木林の山で、小さな半島だけにそれに登れば四辺の田や畑や、人家や、遠く近くの海原を見渡すことが出来る。大きい深山の静寂や森厳は無いが、どことなく親しみやすい明るさを持つてゐる。
其処の程よき場所を選んで、燐寸をすつて火を作り、青い枝を切つて地にさし、酒をうつした土瓶をそれに吊つて火の上にさしかける。火は次第に燃え酒は漸く強い匂ひを四辺の木立の間にみなぎらす。木も匂ひ、火も匂ひ、地も匂ひ、風も匂ひ、やがては照り沈んでいる日光までが酒と同じ匂ひに染まつて来るようだ。
静心しづまりかねつ酒持ちて秋山さして出でゆくわれは
楢山の下葉もみぢにときをりに風渡りつつ酒煮え来る
酒煮ると枯葉ひろふに落葉鳴る落葉鳴りそね山は恐し

冬の歌

冬の山
落葉を恋ふる心はまたともすればその落葉の深い山かげにあくがれてゆく。実際、何か忙しい仕事などしてゐる時でも、ふつとこの真冬の山のことを思ひ起すと矢も楯もたまらぬやうに恋しくなつて来る。ちようど、さういふ時ぶらりと信濃をさして出かけて行つたことがあつた。その時の歌数首
問うなかれいまはみづからえもわかずひとすぢにただ山のこひしき
さびしさを恋ふるこころにうづもれて身に事もなし山へ急がむ
山恋ゆるさびしきこころ何ものにめぐりあひけむ涙ながるる